



緒言

「わかる」に迫る



名古屋大会長 牧 真吉

昨年11月には皆さま名古屋大会に参加いただきまして、ありがとうございました。皆さまのおかげで何とか赤字にならずに運営することができました。今回の学術集会では言葉ではないことがどのぐらい伝わりましたでしょうか。言語レベルに浮かび上がってくるにはまだまだ時が必要なのかもしれません。自分自身がそんな体験をしてきました。

言葉になっていないで行っている交流、これが今のわたしの一番興味のあることです。残念なことにこうした交流を術語として簡単に表現してしまっています。わたしたちにとって術語は便利なものですが、実は理解できないままに覆い隠してしまう作用を持っていると考えています。術語一つひとつを自分なりの言葉に直して理解していくことを私自身は行っているように思っています。しかもどうも直接的な理解は苦手なようで、違う方面から理解ではなく、自分なりに理屈を作っていくとそれがなぜか近づくことになっているようです。今わたしは間主観性という言葉が大嫌いです。わからないことを覆い隠す言葉に思えてなりません。

赤ちゃんは赤ちゃんなりに体験しているようで、わたしたちと交流できることが多くあるみたいです。母親は「この子はもう何でもわかっています」と表現することがよくあります。どこかで感じ取っている言葉だと思えます。私自身は、まなざしを感じ取ると同じような次元で起きていることで、わたしたちはまだうまく言葉にすることができていないと考えています。

運良くというか運悪くというか私自身は理解力もなく、言葉もうまく身に付けることができないでこの年まで来てしまいました。そのおかげで自分なりに、とはいってもこれはほとんどいろいろな人に教えられたことを使っているに過ぎないのですが、少しずつ考えるようになってきました。スターンの自己感の発達に近いような段階を考えるようになっていました。また、トラウマということもわたしには何かしっくりこなくて、以前は体験貯蔵庫という言葉を使ってきましたが、今は動物レベルの脳への記録という言葉にして進化論的にも考えるようになりました。赤ちゃんが使っているのはこの動物脳レベルでの体験をしていて、すべて脳に記録が残されていると考えています。もちろん言葉になっていませんので、言葉のレベルでは使うことができていません。世の中には特別な育ちをしている人もいて、ここの記録を言葉のレベルの脳とつないで、言葉にできるようになっている人もいます。

こうしたわたしなりの展開をさらに進めていきたいと考えています。どうもそのためにはわからなくともいろいろな考えを学んでおくことは必要なようです。スターンの自己感の発達は理解できないままに暗記をしていました。こうした形でこの先も進んでいってみたいと思えます。

今年もまたよろしく願いいたします。

海外招聘講演

からだの響き合い ～ movement therapy ～ 幼児と動きのコミュニケーション力を使うこと

～ Suzi Tortora先生 ～

名古屋大会の海外招聘講師はダンスセラピストの第一人者であるSuzi Tortora先生でした。Suzi先生は笑顔のとても素敵な先生でした。昨年から海外講演はZoomとなり、その分、講師や我々の負担も少ないのですが、直にお目に掛かりたかったと思いました。



Suzi Tortora

さて、講演のタイトルは「ストレスの多いこの時代に赤ちゃんや子ども達と家族でダンス・ムーブメント・セラピーによる育児をしよう」です。講演では実際のプログラムの様子のビデオが流され、先生はそこに登場する赤ちゃんの気持ちを代弁し、赤ちゃんの心を読むことの重要性

を述べておられました。子どもにとって遊びや音楽やダンス、これらは自然な生活の要素なのです。赤ちゃんのボディーコミュニケーションを見ること、そして感情に同調することで赤ちゃんの体験世界に入ることができると思います。ダンスやムーブメントは互いに響き合う自己と他者の関係性を身体で感じ取ることなのです。

身体と心と感情はそれぞれに影響し合います。赤ちゃんを理解するためには感情や心だけでなく、身体的側面もみる必要があるのです。身体と心と感情の3つを組み合わせ初めて、彼らの心のベースを理解することができます。ビデオに出てくる赤ちゃんの表情とは対照的な母親の硬い表情が印象的でした。プログラムを通して、親と子の関係性の修復を図ることが可能となるでしょう。とても共感できる、明日からの診療のヒントを得ることのできた素晴らしい講演でした。

ニューズレター編集部 松原 徹

一般演題

「母子関係作り」の“ポイント”

大阪府阪南市 笠松産婦人科・小児科 笠松堅實



子育てが難しくなっています。確かに子育ての現場、例えば私たちの施設では「母乳育児・支援」が後退しています。「子どもの虐待」の主たる加害者は実母、「虐待死」は0歳が最多、「少子化」は約50年間も続いています。「子育て支援力」低下が大きいのかもかもしれません。家族が少人数(核家族など)となり、地域社会の繋がりは薄くなり、出産施設の対象は(子育てより)ハイリスクの妊娠・出産となっています。この現状で私たちができることは「出産施設、入院中」の「子育て支援」=「母子関係作り」ではないか、と考えました。

以下に、私たちが考える「出産施設、入院中」の「母子関係作り」のポイントをあげます。

「行程Ⅰ」「母子関係」は、早期母子接触時、対面での赤ちゃんの「注視」(サーブ)から始まり、ママが「声掛け」で応える(リターン)と、赤ちゃんの「注目」に出会います。「母と子」の「やり取り」が始まり、進みます。

キーワードは「注視」から始まるやり取り”です。

「行程Ⅱ」日齢1夜がピークの「よく泣く、ひたすら泣く」赤ちゃんは、「(泣かなくなるまで)ひたすら抱っこ、おっぱい」すれば、必ず泣かなくなります。この「ひたすら」が大切です。キーワードは“赤ちゃんはママの‘ひたすら’の抱っこ、おっぱいを待っている”

「行程Ⅲ」日齢1-2での「早めの空腹のサイン」初期(口をチュバチュバ、手・指吸う、探すー原始反射)の1つでおっぱい(授乳哺乳)開始し、繰り返しの“やり取り”でさまざまなサインでの「おっぱい生活」へ進みます。キーワード“おっぱい、初期のサインの1つに決めて、始める”

「行程Ⅳ」日齢3-5には、「やり取り」は「おっぱい」から「好奇心・微笑み」へと進みます。「母子関係」は広がり、深まり、多様化し、1日の全てとなっていきます。複雑さは喜びとなります。キーワードは“赤ちゃんは‘微笑み’でママの係わりを求めている”です。

～ 大人にこそ遊び力&子ども力の滋養を ～

市民公開講座講師を務めて思う

NPO 法人 “ 富山・イタズラ村・子ども遊ばせ隊 ” 早川 隆志



2004年にNPO法人“富山・イタズラ村・子ども遊ばせ隊”を創設して以来、「遊びのワークショップ付き」を掲げた子育て支援講演を行ってきた。皿回しやサソリの標本といった他愛ない遊びで数十分間受講者に遊んでもらうワークショップ。受講者は、まるで子どもに戻ったかのように遊んだ。私の唱える(大人の)「遊び力」の獲得だ。講演内容は主に「一緒に遊ぶ」(例えば親子)ことから生まれた「ナラティブ」。その「ナラティブ」を自分事のように受け止めると、「明日私も皿を回して遊んでみよう」となる。講演後には「おもちゃの駄菓子屋」が開店されている。そして、講演資料には私の似顔絵付きの特製「感想・レポート」が挟み込まれていて、1週間後には主催者に提出されることになっている。

今回の市民公開講座でも名古屋市立の小学校のW校長と臨床心理士のS先生からの感想・報告が寄せられた。W校長は子どもに開放されている校長室に皿回しを置いて、登校を渋る子どもたちと遊んで元気になったという実践記録が、臨床心理士・S先生は母が急逝し悲嘆に暮れる父子家庭の親子が「サソリの標本」を広げ、一緒に驚き笑うことから生まれた感動的な「ナラティブ」が、綴られていた。



この度の光栄な講演依頼は牧真吉氏のご推薦によるもの。なぜ私に白羽の矢が立ったのか知りたくなった。「訳」が書かれたメールが届いた。以前にご著書「自閉症スペクトラムの子どもと“通じる関係”をつくる関わり方」を読了していた。副題には「言葉に頼らないコミュニケーション力を育てる」ともある。さて寄せていただいた「訳」には「言葉以前に起きる交流」遊びには「言葉以前」(感情や感性)が大きく働く”や“交流の本質は言葉ではないところにある”などがあげられていた。最後には、「言葉」だけではない“体験”(遊び)の持つ重みを伝えるのには早川さんが一番いいのだと思い、依頼をしました。」とあった。読み終わって、牧先生がこれまで行ってこられた療育と私の「一緒に遊ぶ」という育児支援は、同じ思想で通底しているのではないかと思った。

これまで私は保護者、保育士、教員、大学生、社会教育を対象にした「講演」を実践してきた。小学生や中学生や高校生には「遊びの授業」を行ってきた。私の仕事の社会的役割とは、子どもの遊び世界の面白さに与ることができる大人の育成である。つまり、子どものさまざまな現場にいる大人たちが子どもたちに対し「遊び支援」ができるようになってもらうことである。コロナ渦で、居場所で、貧困下で、誰も「遊びが大切」とは言わない。聞こえてくるのは、「学習支援」ばかり。今、私は富山市の小学校で「遊びの授業」を再び展開している。子どもたちは遊びに飢えていると感じている。子どもたちは私たち遊びスタッフを「名人!」、「師匠!」と呼び慕ってくる。今こそ、子どもと一緒に遊べる大人が、「一緒に遊ぶ」という「遊び支援」が必要ではないだろうか。

つながるまい つながりん



日本福祉大学社会福祉学部 牧 真吉

周産期の生まれる前後での関わり、その後の支援という形でシンポジウムを組ませていただきました。時間などの関係で順番が逆になりましたが、周産期では、初めに産婦人科医の高橋裕一郎氏から講演していただきました。新しい周産期医療の試みと、そこにおける親子関係への配慮、産科でこれほど配慮していただくと関係のはじまりから違って来るだろうことを思わせていただきました。これを受けて周産期に関わる保健師、助産師、心理師、さらに乳児院と児童相談所、出産直後に預けられる福祉の現場の話も聞きました。田原市では、出産前から担当保健師を決め、家庭訪問して関係を築き、出産前から不安に関わっていけるようにしている状況を聞きました。助産院は丁寧に産後ケアに関わるようになってきていること、総合病院ではハイリスクのケースに多職種で関わるようにし、さらには地域の機関ともつながることを行っていることを知ることができました。この期間に丁寧に関わることができると違って来るのだろうと思わせられました。

そして幼児期から学童期にかけて、うまく育っていない子どもが現れてきます。保育園で気になる子が8割近くになってしまうこと、保育所等訪問支援などの機能もできてきていて良い報告例を聞かせていただきました。しかし、そこからこぼれ落ちて大きな問題を起こすようになってきたケースに学校で関わることをしていかないといけなくなります。こうした報告を、小学校、学校カウンセラー聞きました。親自身がうまく育ててもらっていないために親をカウンセリングする必要性が出てくることも聞きました。小児科医、精神科医が関わる中で気になっていることをあげてもらいました。

乳幼児期の早期の問題が、大きくなるに従って、いろいろなことが起きてくること、そして子育てをする親の問題にまでつながっていることをあらためて確認することができました。子育ての親を支えることを早期から、さらに早期が子どもが育っているときと考えることが大事だと思いました。

2023年 世界乳幼児精神保健学会(WAIMH) 第18回 世界大会

テーマ EARLY RELATIONSHIPS MATTER:
ADVANCING PRACTICE, POLICY AND RESEARCH IN INFANT MENTAL HEALTH
早期の関係性こそが重要：乳幼児精神保健における臨床、政策、研究の進歩

Dublin Ireland

日時 2023年 7月15日～19日

場所 アイルランド ダブリン

早期登録 4月3日まで

参加費 早期登録の場合 550ユーロ 約77,000円
早期登録以外 650ユーロ 約91,000円

● ワールドナビゲーションによるツアー予定

● 参加を考えている方、または参加予定の方向けに事前の説明会や顔合わせ会をZoomで計画中。

※詳細は決まり次第ホームページでお知らせします

国際委員 澤田由紀子

WEB講演会のご報告

2022年12月18日、講演会『四万十町こども園「たのの」で17年間続いのちの学習「カンガルーのポッケ」～命の大切さを伝え自己肯定感を高める学習』がオンライン開催されました。

「カンガルーのポッケ」は、澤田由紀子先生(高知出身、フリーランス小児科医)が、カナダ・トロントの共感教育(Root of Empathy)の理念をヒントに、日本の家族、地域、文化に照合して作られ、2006年に始まりました。澤田由紀子先生より、活動を始めるにあたり、地域の統合に伴い財政的な支援が受けられたことや、日本人に馴染みやすい教材の工夫など話されました。小児科医、保育士、地域の住民が協力して進めていること、保育・教育の現場での展開についてお話があり、当初より一緒に活動してこられた、認定こども園「たのの」園長門田清子先生他、当時の保育士の方々が、子どもたちの反応や様子など、写真・映像を交え振り返りながら今日に至る体験を話されました。

「たのの」では、聴診器で心臓の音を聞く、胎児エコーを見る、胎児人形に触れる、赤ちゃん、お腹の大きいお母さんと接する、いのちの学習を経た中学生とそのお母さんの話を聴く、高校生と交流するなど、

体験が多く組み込まれ、子どもたちが日常の中で自然に命のことを学び育っていく姿を見ることができました。

高知新聞ココハレ(子育て支援ウェブメディア)記者門田朋三さん(高知出身。2021年度に1年間この活動を取材*)からの感想も加わり、そして、新宮一夫先生(島根県出雲出身、心理カウンセラー・心理アドバイザー。認定NPO法人カンガルーの会会員)は、この長年にわたる活動についてのお話を丁寧かつ端的に整理され、講演者にも確認いただきました。また、オンライン参加者からは、児童養護施設で取り組んでいきたいという積極的な意見などもあり、講演者と参加者がつながる相互的な時間になりました。

“なぜこの学習が17年間も続いているのか” 命の授業の根底にROE(共感の根)の教え、その上に、由紀子先生と現場の先生の間主観的なやりとりがあり、出来上がる過程にすでにわくわく、生き生きしていて、それが続いた秘訣だろうということでした。だからこそ子どもにとって大変重要で、もっと広がってほしいと感じました。

※取材記事は学会HPIにも掲載されています。
この講演会は、オンデマンド配信中です。

東京支部
tokyofourwinds@gmail.com



2023-2024年度 一般社団法人日本乳幼児精神保健学会理事

2023-2024年度の理事が一般社団法人日本乳幼児精神保健学会定款22条に従い別に定めた理事選出規定に基づき選出されましたので報告いたします。(五十音順)

	理事名	職種
1	犬飼 和久	小児科医
2	内海 千枝	保健師
3	大場 エミ	保健師
4	香取 奈穂	小児科医
5	川口 孝一	児童精神科医
6	川畑 友二	児童精神科医
7	菊池 信太郎	小児科医
8	北島 博之	小児科医
9	黒崎 充勇	児童精神科医
10	酒井 信子	小児科医
11	澤田 修	精神科医
12	澤田 敬	小児科医
13	澤田 由紀子	小児科医
14	新城 正紀	公認心理師
15	鈴木 薫	NPO理事長
16	鈴木 廣子	児童精神科医
17	Dalrymple 規子	大学保育学教員
18	田中 徹哉	児童精神科医・小児科医
19	田中 祐子	小児科医
20	富森 崇	臨床心理士、公認心理師
21	成井 香苗	臨床心理士
22	長谷川 京子	弁護士
23	牧 真吉	児童精神科医・大学社会福祉教員
24	松原 徹	小児科医
25	渡邊 久子 代表理事	児童精神科医

日本乳幼児精神保健学会 事務局

〒963-8871 福島県郡山市本町 1-13-17 医療法人仁寿会 日本乳幼児精神保健学会事務局

TEL 024-932-0154 FAX 024-932-0245

E-mail info@japan-aimh.com <https://japan-aimh.smartcore.jp/>

世界乳幼児精神保健学会 日本支部



会費のお振込みは下記の口座をお願いします

みずほ銀行（金融機関コード：0001）新横浜支店（店番号：356）

普通預金 3055110 一般社団法人日本乳幼児精神保健学会